

第3学年 リーディング 前期末考査の作成にあたって ～定期テストの波及効果を授業改善に生かすために～

1 はじめに

昨年度、「授業と評価の一体化」を基本に、定期テストが授業時の学習活動により一層基づいたものなるよう、研究を重ね、授業改善に生かす取り組みをしてきた。今年度も授業内容ができる限り反映されるようなテスト作りを心がけた。

昨年度に引き続き、次の点に留意した。

- ・ 「聞くこと」「読むこと」「書くこと」といった内容のまとまりについて包括的に評価する。あらゆる科目において聴き取り問題、英作文を出題し、科目名にとらわれず、「話すこと」以外の内容のまとまりをすべて盛り込む。
- ・ テストが与える波及効果をねらう。テストの出題に対する関心を、授業そのものに対する意欲・関心の向上に結びつけ、さらに学習すべきことを意識させて効果的な学習につなげる。テスト範囲の提示の際に、問題形式や過去に出題した問題を提示することもできる。
- ・ 出題の意図を明確にし、各問題の評価が、生徒の評価とするだけでなく、教師の授業評価とみなし、テスト後の授業の工夫に生かす。

また、昨年度末に課題として提示した次の点にも留意した。

- ・ テスト問題の妥当性を検証するために、設問ごとにデータを取る。個々の生徒にとってどの程度波及効果があったか、同一形式の複数回にわたる定期考査において定点観測する。
- ・ 授業やテスト、評価方法に関して生徒に評価させる。評価方法としては、点数化とアンケート形式の両方を実施し、生徒自身の学習姿勢についても自己点検させる。
- ・ 3年次に設定されているリーディング、ライティングにおいても、それぞれ「読むこと」あるいは「書くこと」に特化せず、いかに4つの内容のまとまりを組み合わせる授業展開できるか研究する。本テストは、リーディングのテストであるが、後述の通り、「聞くこと」を15%、「書くこと」を30%盛り込んだ。また、表現の能力にも10%割いた。

2 定期考査における評価の対象

表(1)、表(2)の通り、定期考査は、ペーパーテストであるため、「話すこと」を評価の対象から外すこととなる。また、「コミュニケーションの意欲・関心・態度」についても、授業中の活動またはその活動の結果を評価の対象とし、定期考査では評価しない。

表(1) 評定のウエイトバランス表

観点 評価方法		配分 (%)	ア	イ	ウ	エ
			コミュニケ ーションへ の関心・意 欲・態度	表現の 能力	理解の 能力	言語や文化 についての 知識・理解
一斉	定期テスト(4回)	70		10	35	25
授業時	発表の評価	10	5	5		
	活動の観察	10	5	5		
	授業プリント・作品	10		5		5
観点別合計		100	10	25	35	30

表（２） 前期中間考査の「内容のまとめり」と「評価の観点」ごとの配点表

観点 内容のまとめり	配点	ア	イ	ウ	エ
		コミュニケーションへの関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
聞くこと	15			15	
読むこと	55			35	20
話すこと					
書くこと	30		10		20
観点別合計	100		10	50	40

3 問題設定の趣旨（内容のまとめりと評価の観点）

1 【聞くこと－理解の能力】

既習のまとまった英語の文章を聞かせ、正確な内容把握の能力を測定した。授業時、各 Part の導入において、教科書を閉じたままで、テキストの CD を聴かせ、口頭の英語による比較的簡単な質問を与え、英語で答えさせている。口頭の場合は、質問に対して、最小限の応答の仕方（疑問詞に対する答えや Yes/No）で十分としている。本テストでは、質問の難易度を高く設定し、まとまった英語の文章を 1 回、問題文を 2 回繰り返すこととした。また、質問に対して、完全な文による選択肢をテスト紙面に記載した。これは、口頭による応答の代わりであり、完全な応答文を書かせることが聞き取りの能力の測定につながらないためである。

2 【読むこと－理解の能力】

既習のまとまった英語の文章を読ませ、パラグラフの概要と [導入]、[主題文]、[支持文] の列挙といたった展開が掴めているかを測定した。空所は、およそ 20 語毎に設定してあるが、無作為に空所を設定するには、テキストの分量が十分でないため、テキストの内容を把握する上で、鍵となる語を中心に選択させることとした。授業時には同形式の設問を与えてはいない。しかし、この課では、retelling の活動を行っており、読み込みの段階において、内容語に注意させている。なお、ダミーの選択肢を 1 つ設け、不注意によるミスや消去法による解答につながらないようにした。

3 【読むこと－言語や文化についての知識・理解】

既習のまとまった英語の文章を読ませ、連結語句、コロン、二者の関係を示す語句や文章など、Reading Skill－[比較・対照]－の構成と展開を意識して読む技術が定着しているかどうかを測定した。各課に 1 つずつ Reading Skill があり、それに基づき範例文の構成と展開について確認と解説を行っている。問題文の表は、範例文中の主題文と支持文のつながりを整理し、展開をまとめるために授業で用いているものであり、ほぼ同じ内容で出題した。

4 【読むこと－理解の能力】

既習のまとまった英語の文章を読ませ、パラグラフの概要と [主題文] の内容について原因を述べていく展開が掴めているかを測定した。[主題文] と [支持文] の因果関係と各 [支持文] の相互の繋がりを示す連結語句や内容を手掛かりに、どのようなことが原因で、どのような結果を生じたのかを的確に掴むことが要求される。よって、英文の空所補充の形式となっているが、むしろ文整序として位置づけたい。また、授業では、この問題文を日本語で表にまとめる活動を行い、各英文についても訳例を配布し意味の確認をさせている。

5 【書くこと－言語や文化についての知識・理解】

既習のまとまった英語の文章を読ませ、語彙や語法・文法事項が定着しているか測定した。日本語訳をそのまま与え、必要な情報を拾って迅速に答えることを求めた。出題の対象は、授業中に取り上げた重要単語・熟語はもとより、二者の類似点を示す表現や倒置・関係副詞といった文法事項も含まれる。授業では、既習語彙の小テストは行っていないが、確認プリントを復習として与えている。なお、空所

に綴りの一部と文字数を示すアンダー・バーが示してあるのは、ヒントの役割と複数解答を避けるためである。

6 【書くこと－表現の能力】

既習の範例文を参考に、自分の人生を時間的順序に従って、まとまった分量の英文で表現できるか測定した。さらに、[主題文]あるいは[まとめ]と時間的順序で展開される支持文との適切な関連性も測った。出題範囲においては生徒が最も取り組みやすい手法であり、パラグラフ・リーディングの技術習得の発展として授業時に取り寄せたものである。授業同様、5文以上の英語で書き表すこととしたのは、生まれてから今日までの生い立ちに加えて、[まとめ]の文を書かせる必要があり、最低限の分量とみなしたからである。

7 【書くこと－言語や文化についての知識・理解】

授業時、文法的・構造的に理解の難しい項目として取り上げたものを出题し、初出の文においても文の意味と関連付けて、用法が理解できているかどうかを測定した。授業では、テキスト内での用法や意味の確認や複数の例文の提示、確認プリントにより定着を図っている。

4 前期末考査実施結果

問題	1	2	3	4	5	6	7	合計
内容の まとめ	聞くこと	読むこと	読むこと	読むこと	書くこと	書くこと	書くこと	
観点	理解の 能力	理解の 能力	知識・ 理解	理解の 能力	知識・ 理解	表現の 能力	知識・ 理解	
配点	15	20	20	15	10	10	10	100
全体平均	10.9	14.5	13.6	12.2	2.4	5.5	4.7	63.8
得点率	72.6	72.6	68.2	81.6	24.1	54.8	46.6	63.8
○クラス	11.9	15.2	13.3	11.9	2.2	4.4	4.4	63.1
□クラス	10.1	12.4	12.8	12.0	1.3	5.5	3.9	58.0
△クラス	8.5	10.9	11.6	10.3	1.5	4.5	3.2	50.3
☆クラス	12.8	19.0	16.6	14.5	4.5	7.3	6.9	81.5

5 出題結果の傾向と授業へのフィードバック

1 【聞くこと－理解の能力】

得点率が全体で72.6%と生徒にとって取り組みやすい出題となった。また、クラス間で得点率の差があまりなかった。聞き取る英語の文章が既習なので、授業中あるいはテスト勉強などで英文の内容を十分に理解している者は、質問文の聞き取りができれば正解につながったようだ。質問文の難易度を高く設定したはずだが、完全な文の選択肢を記載したために、生徒の解答を助けることにつながった。また、テストの合計点の偏差に比べて聞き取り問題であまり差が出なかった点から、今後も全クラスを通して授業で聞き取りの活動を継続的に行い、生徒の学習意欲と集中力を引き出しながら、聞き取り能力を高めていきたい。

2 【読むこと－理解の能力】

得点率が全体で72.6%と生徒にとって取り組みやすい出題となった。しかし、クラス間で得点率の幅が大きかった。△クラスでは半分程度の正解率であったが、☆クラスでは、大部分の生徒が全問正解であった。何度も読み込んでいる文章が出題されており、授業中の活動(retelling)において意欲的に取り組んでいる生徒、段落の展開を理解し、内容語に気をつけている生徒は、高い得点となった。得点の差は、理解の能力を表すのはもちろん、授業中の活動の効果を表している。retellingを表現能力の向上のためだけでなく、理解の能力を伸ばす効果があることを生徒に意識させたい。また、retellingに学力の低い生徒も取り組みやすいよう発表用資料に工夫が必要である。

3 【読むこと―言語や文化についての知識・理解】

得点率が全体で 68.2%と比較的取り組みやすい出題となった。しかし、☆クラスと他のクラスの間得点率の差が大きい。問題文の表は、授業で用いているものとほぼ同じであり、試験範囲の発表時にこの形式の出題を予告してあったせいもあり、この問題でまったく得点できない生徒はいなかった。授業で取り組んだ教材がほぼそのまま出題されたことにより、生徒が授業に、より一層意欲的に取り組むことが期待できる。

4 【読むこと―理解の能力】

得点率が全体で 81.6%にのぼり、☆クラスの生徒の大部分が全問正解であった。しかし、☆クラスと他のクラスの間得点率の差が開いた。この問題も既習の英文を扱っているため、日常的に英語学習に時間を割いている生徒にとっては、大変簡単な問題となった。ただし、テスト中に読まなければならない英文の量は少なくなく、既習の英文であっても速くかつ展開を意識して読むことが求められる。授業時に読む速度を計測し速読の訓練をしているが、今後も継続し、どの程度の内容把握が求められるのか活動を通して身につけさせたい。

5 【書くこと―言語や文化についての知識・理解】

得点率が全体で 24.1%にしか達しなかった。クラス間で得点率の差が最も大きかった。半分程度の得点率であった☆クラスの生徒の定着度を測るには適していた。問題 1 から問題 4 までが得点率が高く差がつきにくいので、このような出題もテスト全体の難易度のバランスからすれば、結果的に適当な出題であった。しかし、問題文は既習のみならず、重要な語彙・文法・語法として指導したにも関わらず、定着の度合いが低かった。比較的簡単な語彙を出題したつもりだったが、実際に綴りを正確に書くとなるとかなり難易度が上がるようである。書いて覚えるという基礎訓練や問題演習といった方法も見直していきたい。

6 【書くこと―表現の能力】

☆クラスと他のクラスの間得点率の差は大きかったが、他の 3 クラスの間にはあまり差がなかった。学力の高い生徒は容易にこなし、そうでない生徒は白紙解答が目立った。得点率は他の出題に比べると両極端に別れたが、同形式の昨年度の出題に比べると、白紙解答が減った。「自分のこれまでの人生」という身近な自分自身の話題であったため、取り組みやすかったのではないかと思われる。時間的順序で書くという比較的易しい条件であったが、[まとめ]の文と支持文のつながりが不適切なケースも目立った。今後の授業では、「とにかく書いて表現する」指導から、パラグラフ・ライティングをもっと意識させる指導に重点をおく必要がある。

7 【書くこと―言語や文化についての知識・理解】

得点率が全体で 46.6%と低かった。クラス間得点率の差も大きかった。測定した文法項目や語句は、既習のものであったが、一部を除いて初出の英文の中に入れて出題した。出題形式は語句整序であるが、しっかりと定着していれば、初出の英文であっても既習の英文であっても特に違いはないのではないかと思われる。今後は、同じパターンのような様々な英文に触れさせ、さらに、「話す」「書く」という表現活動を通して定着をさらに進めたい。

【その他】

学年が進行するにつれて生徒間の学力差は広がっており、なかには、あきらめたり投げ出したりする生徒もいる。そうした現状の中で、前回同様、テスト範囲の提示だけでなく、事前に問題形式や同形式の過去問題を提示することによって、勉強に対するやる気を取り戻す生徒も出てきた。理解・定着以前に、学びの拒否に陥らせないための工夫の必要性を痛感した。

6 成果

- リーディングは、「読む」能力を高めることが最も大きな目標であるが、1～2年次に履修した英語 I や英語 II と同様、4つの内容のまとまりを組み合わせることで授業展開することができた。「読む」活動が、最終目標ではなく、「話すこと」「書くこと」という表現にまで高める活動を位置付けたことは読んだことを定着させる上でも有効であったと考えられる。

- ・ 教える側がテストの重要性を改めて認識した。授業が出題方法や形式などテストにどれだけ反映しているかチェックしながらテストを作成するができた。
- ・ テスト問題の妥当性を検証するために、設問ごとのデータを取ることで、各問題の傾向がつかめた。問題の難易度、教師の期待度、生徒の達成度、そして何よりも各問題の実施結果からどんな点を授業にフィードバックすればよいのかが判った。
- ・ 生徒による教師の授業評価、教師自身の自己評価では、教師が全く気づいていない点の指摘もあり、実施意義を再認識した。授業評価は、本校においては平成15年度より実施しており、評価そのものに対する抵抗感は、生徒も教師も少なくなっている。
- ・ 出題の意図を明らかにするという作業を通じて、教師がどのような能力を測ろうとしているのか、その判断は正しいのか、他の教師ならどう判断をするかということに常に意識させられた。さらに、テスト問題は、1つの問題に1つの観点ということが徹底したために、総合問題を作らなくなり、より見やすくアカウンタビリティの高いものとなった。
- ・ この研究の主な目的であるテストによる授業への波及効果については、生徒の授業中の学習意欲や **retelling** など難易度の高い活動への取り組み方を見ていけば、態度の面だけでも大きな効果があったと思われる。さらに、生徒は何をどのように、どれくらい勉強すればテストの点が上がるのかわかり、いわゆる「勉強の仕方」がわかったようである。
- ・ もう一つの波及効果は、問題作成者（授業担当者）や他の教師の授業改善を一層進めたことである。今まで印象的、経験的、あるいは総体的にしかつかめていなかった授業の効果を、観点別に検証することができた。

7 来年度への課題

- ・ 問題作成の関係で複数回テストのデータを取っていないため、前期末考査の傾向はつかめるものの、推移を観測するまでには至っていない。正確な分析のためにも学年全体・学校全体で同じ方向を向いた取り組みをする必要がある。
- ・ テストと授業評価の結果分析を通して、今後さらに授業改善に生かしていきたい。